

## 【総説】遊びとしてのリトミック活動に関する研究： カイヨワの遊びの要素イリンクスを踏まえて

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-10-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高牧, 恵里, 松井, いずみ メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1588">https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1588</a>

## 【総説】

# 遊びとしてのリトミック活動に関する研究

—カイヨワの遊びの要素イリンクスを踏まえて—

高牧 恵里

Musashino University Creating Happiness Incubation 研究員 武蔵野大学 教育学部 講師

松井 いずみ

Musashino University Creating Happiness Incubation 客員研究員 明星大学 教育学部 特任准教授

## 要約

ドイツの教育学者であるフレーベルは「幼児の遊びの重要性」を教育理念としている。一方、リトミックには音楽教育・身体運動など学習的な側面もあるが、それはある種の訓練のように強要されるものではなく、自由であり主体的である「遊び」であることによって、より子どもたちの感性を豊かにし、創造性を育むことができると言えるだろう。

本研究ではカイヨワが唱えた遊びの要素である「イリンクス」に注目したりトミック活動を計画・実践した。保育の環境において安全性を重視した上でイリンクスの要素を含む活動を計画することは難しく、工夫を必要とする。しかし、今回の実践で音楽やリズムに合わせた身体の動き、すなわちリトミックを併用することで子どもたちは危険を回避し、より楽しみながらイリンクスの要素を経験できることが確認された。リトミック活動はカイヨワの唱えた4つ要素をバランス良く含む「遊び」であるということが明確になったと言える。

## 1. はじめに

昨今、幼児の自発的な活動としての遊びを通して、総合的な保育をすることが重要視されている。

「遊び」について『広辞苑』を調べると最初に「あそぶこと」と記載されており、「遊ぶ」について調べると「日常的な生活から心身を解放し、別天地に身をゆだねる意」<sup>1</sup>と示されている。「遊び」の定義は難しく、中野(2019)は、ホイジンガーやヴィゴツキー、ピアジェなどの研究例を挙げ、「同じ『遊び』という語を使っているにもかかわらず、研究者によって、その意味することは異なってい

る」<sup>2</sup>と述べており、また「遊びの質」についても、「それが有意義か不道德・無意味かは見ている大人側の問題である」<sup>3</sup>としている。子どもが積み木を使って慎重に何かを作り始め、できあがる前におもむろにその積み木を全て崩した時、その崩した行為を「遊び」と定義するか、また「遊びの質」ではかれるかどうか規定するのは難しいと言える。

一方、エミール・ジャック＝ダルクローズ（Émile Jaques＝Dalcrose,1865-1950,以降ジャック＝ダルクローズと表記する）が考案したリトミックは、子どもが身体を使って音楽の諸要素を学び、幼児の諸内外的な表現能力を高める教育法である。リトミックには、音楽教育・身体運動など学習的な側面もあるが、それは子どもたちにとって、ある種の訓練のように強要されるものではなく、自由であり主体的である「遊び」であることによって、より子どもたちの感性を豊かにし、創造性を育むことができると言えるだろう。

また、フランスの哲学者ロジェ・カイヨワ（Roger Caillois,1913-1978）は、著書『遊びと人間』の中で、遊びのすべてに通じる不変の性質として、アゴン（競争）・アレア（運）・ミミクリ（模擬）・イリンクス（眩暈）の4つの要素を提示している。<sup>4</sup>

そこで、本研究では、これらを踏まえた上で、カイヨワが唱えた遊びの4つの要素の視点を拠り所として、リトミック活動における「遊び」について考察していく。先行研究として、学校体育やスポーツにカイヨワの遊びの視点を関連付けて書かれたものが見受けられたが、カイヨワの遊びの視点から音楽活動を分析したものは管見の限り見当たらない。

## 2. 研究の目的

本研究では前回の課題を踏まえ、カイヨワが唱えた4つの遊びの要素のうち、イリンクスの要素に注目した活動内容を計画し、実践・検証を行う。これらを通して、リトミック活動が遊びであるかについて明らかにしていくことを目的とする。

## 3. 研究の方法

まず保育における遊びの重要性について、ドイツの教育学者であり、幼稚園

の創設に力を注いだフリードリヒ・ヴィルヘルム・アウグスト・フレーベルの「幼児の遊びの重要性」を教育理念としていることを参考にしながら再確認する。

次に、前回までの研究内容と結果について振り返り、課題を明確にする。

そして、本研究の目的に沿ったリトミック活動を計画し、A 幼稚園にて実践、その動画を分析するとともに検証していく。実践は、幼児期の発達過程を踏まえ、幼稚園の年中クラスを対象とする。

#### 4. フレーベルが示す「遊びの意義」

フリードリヒ・ヴィルヘルム・アウグスト・フレーベル (Friedrich Wilhelm August Fröbel, 1782-1852) は、『人間の教育』(Die Menschenerziehung) の中で「遊び (Spiel)」について、次のように述べている。

「遊戯は、この段階の人間の最も純粋な精神的所産である。」<sup>5</sup> (Spiel ist das reinste, geistige Erzeugnis des Menschen aus dieser Stufe.<sup>6</sup>) とあり、「遊戯

(Spiel)」がこの時期の子どもの成長にとって最高の産物であると記されている。遊びを通して、自己の中に潜む内なるものや秘められたものが、喜びや自由や満足等の自分の内外の平安と世界との和合を生み出すとしている。<sup>7</sup>

更に、『幼稚園教育学』においては、「遊びの意義は、遊びを通じて人生の最高の課題、すなわち現象のあらゆる変化の中にあっても、一つの高い目標を確保するという課題を提示し解決することである。」<sup>8</sup>と記している。「遊びは、自分のうちにあるものを自分で自由にあらわしたもので、自分の必要と要求から表現したものである。」<sup>9</sup>としており、子どもの中に内在しているものを自発的に表現し始めることを意味している。このことは、子どもの遊びによって、子どもの心の中に生じるものから、遊びの間に子どもの心に目覚めさせられ、発展し、形作られるもので、子どもがその遊びの中から歓喜を感じたり、満足感を得られるものであると述べている。<sup>10</sup>

1823 年からは、「幼児教育の根本は何よりもまず幼児を遊ばせながら導くこと、遊びを指導すること、または彼らを楽しませながら同時に力を発展させることに努力しなければならないという確信を得ている。」<sup>11</sup> と述べており、子

どもの身体の発達を理解した上で、身体の発達に合わせて身体の各部位を動かし、調和的に発達させることも重要としている。

1850年、フレーベルは、アルテンシュタインにて『アルテンシュタインにおける遊戯祭』を開催し、ザルツンゲン市の全教師とさまざまな生活環境やいろいろな学年の幼児や生徒、約300人が参加した。この遊戯祭の意図は、子どもたちの心身の健全な成長を助けるために、子どもたちの個々の教育や能力に応じた課題をこなし、全体の統一を計りながら、行進やお遊戯を披露することだった。そして、まだ教育を受けていない幼児や少年たちにもよく観察してもらい、教育の必要性を理解してもらう良い機会とした。会場入口に「子どもの遊びにはしばしば深い意味がある。」と掲げられた言葉は、まさにフレーベルが伝えたかった理念そのものであった。<sup>12</sup>

『母の歌と愛撫の歌』は、フレーベルの作詞、ロバート・コールマンの作曲による作品で、ロマン派時代のロマンティックな曲想を楽しむことができる。このように、母と子と一緒に絵を見て楽しんだり、歌を歌ったりする等、母子ともに学び、楽しみながら成長できる歌であると考えられる。これは、日本の「わらべうた」にも通じるものがある。

現在の幼児期の教育・保育を考えると、育みたい資質や能力を保育者が教え込むのではなく、子どもたちに内在している産物を導き出すという考え方はフレーベルの教育理念と一致していると考えられる。そして、導く手段は、子どもたちの「遊び」の中にあると考えられる。

幼稚園教育要領において、「主体的、対話的な深い学び」を推奨している昨今、知識や技能の基礎を作り、思考力、判断力、表現力等を育て、さらに学びに向かう力、人間性等を育むためには子どもたちの「遊び」が大変重要になっているのである。

今回わらべうたを使ってリトミック活動を行ったが、子どもたちが日本のわらべうたを聴いて、どのように感じ、どのような動きをして表現しようとしたかについて分析し、検証する。

## 5. 前回までの研究結果と課題

フランスの哲学者ロジェ・カイヨワ (Roger Caillois, 1913-1978) は、著書

『遊びと人間』の中で遊びのすべてに通じる不変の性質として、アゴン（競争）・アレア（運）・ミミクリ（模擬）・イリンクス（眩暈）を提示し、これを基点に文化の発達を考察した。一方、ジャック＝ダルクローズが考案したリトミックは、子どもが身体を使って音楽の諸要素を学び、幼児の諸内外的な表現能力を高める教育法である。

前回の研究では、リトミック指導における遊びの精神について探るため、まずは全日本リトミック音楽教育研究会編著、板野平・溝上日出夫監修の『リトミック指導2 [4才児]』<sup>13</sup>に示されているリトミック活動について、カイヨワの遊びの分類をもとに分析を行なった。

次に、筆者らが幼稚園の年中クラスにてリトミックワークショップを開催し、その内容を同じように分析・検証した。

分析・検証の結果、リトミック活動には、幼児の自発的な活動としての遊びを通しての総合的な指導内容に適していることがわかったが、カイヨワの4つの遊びの要素のうち、全体的に「イリンクス（眩暈）」の要素が少ないということがわかった。<sup>14</sup>

カイヨワは、渦巻きを意味するギリシア語である「イリンクス（眩暈）」について、「急速な回転や落下運動によって、自分の内部に器官の混乱と惑乱の状態を生じさせて遊ぶ。」<sup>15</sup>、「一時的に知覚の安定を破壊し、明晰であるはずの意識をいわば官能的なパニック状態におとしいれようとするもの」<sup>16</sup>と説明し、具体例として「子供のぐるぐるまい」「ワルツ」「スキー」「空中ブランコ」などを挙げている。<sup>17</sup>

保育において子どもたちの安全を確保することは最も重要である。保育室のような限られたスペースに、大勢の子どもがいる中で、例に挙げられたような遊びをそのまま取り入れることは難しいが、指導者が工夫することで、もしリトミック活動の中にイリンクス（眩暈）の要素をふんだんに取り入れることができれば、リトミック活動は子どもたちの遊びとして、より魅力的なものになるだろう。前回の研究では、この点が課題として残された。

## 6. 実践の内容と活動計画の主旨

前述の通り、カイヨワは「イリンクス（眩暈）」の要素について、「急速な回

転や落下運動によって、自分の内部に器官の混乱と惑乱の状態を生じさせて遊ぶ」<sup>18</sup>と説明している。例えば子どもが1人その場で回転を続け、平衡感覚を失いフラフラする感覚などがそれに当てはまるが、園の環境の中で子どもたちの安全を確保しながら活動に取り入れるためには工夫が必要である。

本研究の実践場所として、A幼稚園にある面積209.16 m<sup>2</sup>のホールをお借りすることができたため、広さをいかして、それぞれの子どもたちの周りに十分なスペースを確保した上で、ひとつひとつの活動に対して安全面を配慮したイリンクスの要素を含ませることを念頭に置き計画した。

また、実践時期が初夏であったことや、それぞれの活動に共通するテーマとストーリー性を持たせることで、子どもたちの集中力を持続させ、イメージを広げ、表現力を引き出すために、活動全体に対して「海」というテーマを設定した。

### 活動1. 即時反応 ステップ

内容：「海へ出発！」という声のもと、歩く（四分音符）、止まる（休止）、後ろへ下がる（二分音符）、そっと歩く（二分音符）、走る（八分音符）など、ピアノの即興音楽をよく聴きながらリズムに合わせてステップをする。

リトミックの主な要素：即時反応・基礎リズム

計画の主旨：最初に、子どもたちがしっかりと音楽を聴く環境を整えた。音楽をよく聴き、音楽に合わせて身体を動かすことにより、予測不可能な危険は起きにくいと考える。更に、イリンクスの要素を多く含む「走る」では園児が輪になり一方向に進むことで、衝突の危険を回避する。

### 活動2. わらべうた「こまんか」

内容：歌詞「こまんか こまんか こまんかなみ もちっと ふとおな〜れ」

最初は座ったまま、音楽に合わせて二分音符の速さで小さな波を指で表現する。次に手のひらを使って波を表現し、肘より先、腕全体、そして立って腕、頭、腰、ひざなどを使って、徐々に波が大きくなる様子を表現する。

リトミックの主な要素：強弱・空間・フレーズ

計画の主旨：子どもたちが大きな波を表現する際、足を横に動かさず腰から上

を振り回す方法でイリンクスの要素を経験する。また、わらべうたを使用することにより、子どもたちも一緒に歌いながら動くことができる。身体を振り回す際には、その歌い方が更に相乗効果を生み、イリンクスの状態を楽しむことが期待できる。

### 活動3. わらべうた「おおなみこなみ」

内容：歌詞「おおなみこなみ　こんまいなみおいちよいて　おっけななみばかりこい　ばかりこい」

活動2「こまんか」で体験した動きを、本活動では2人組になり向かい合った状態で両手をつないで行う。歌詞に合わせ「おおなみ」で、つないだ両腕を大きく振り、「こなみ」で小さく振る。「こんまいなみおいちよいて」の部分ではまだ小さく両腕を振り、「おっけななみ」で大きく振り、「ばかりこい」では両手をつないだまま片腕の下をくぐり、背中合わせになる。次の「ばかりこい」で再度腕の下をくぐり、向かい合わせの状態に戻る。

リトミックの主な要素：即時反応・強弱・空間・フレーズ

計画の主旨：活動2の「こまんか」と同じように身体を使って、波の揺れを表現する。本活動では2人組になり両手をつなぐため、自分以外の力が加わることで、操作不能な状態を楽しむ。また、わらべうたを使用することにより、歌詞に合わせ、振り回す瞬間と動きを抑える瞬間を交互に楽しむことができる。

「こんまいなみおいちよいて」の部分でエネルギーを蓄え、「おっけななみ」の部分で心と身体の準備をし、「ばかりこい」でエネルギーを放出させ、イリンクスの要素を増長させることが期待できる。

### 活動4. わらべうた「おふねがぎっちらこ」

内容：歌詞「おふねがぎっちらこ　ぎっちらこ　ぎっちらこ　おふねがぎっちらこ　ぎっちらこ　ぎっちらこ」

2人組で向かい合って座り、両手をつないだ状態で音楽に合わせてお互いを引き合い、身体を前後に揺らす。歌は、速さと強弱に変化をもたせ、子どもたちはお互いに影響し合いながら波に揺れる船を表現する。



次に、背中合わせになり、両腕を組んで船の形を変える。相手の背中への力加減を感じながら、子どもたちは自然に「時間」「空間」「エネルギー」の調整を行う。

**リトミックの主な要素：**強弱・速度・音の高低・空間

**計画の主旨：**身体全体を使い、普段あまり馴染みの少ない腹筋運動のような動きをするが、単純な歌詞と動きであるため、子どもたちは音楽と動きに集中できると考える。両手をつないでいるため、相手が支えとなり、更に大きく前後に動くことができ、イリンクスの要素を楽しむことができる。なお、子どもが後ろに倒れる動きをするため、それぞれの後ろのスペースの確保に十分留意する必要がある。

#### 活動5. 4拍スカーフ投げ

**内容：**四分音符で4拍スカーフを振り、次の4拍でスカーフを上に向けてタイミングよく掴み取る。ピアノの伴奏は、強弱・速さ・音の高低に変化をもたせ、全員で大きな海原を表現する。

**リトミックの主な要素：**即時反応・強弱・速度・音の高低・空間・拍子・フレーズ

**計画の主旨：**子ども一人ひとりの上部の空間を活かし、縦方向の動きでイリンクスの要素を楽しむ。ピアノの伴奏は4拍子の曲で、スカーフを4拍分振ることでエネルギーを蓄え、次の4拍分で放出させる。子どもたちの視点はスカーフに集中し、視野が狭くなることが予想されるため、一人ひとりの周りに十分なスペースを確保し、指導者は常に全体の様子を注意深く見守る必要がある。

### 7. 実践の分析と検証

実践は以下の方法で行われた。

対象：A 大学附属幼稚園 年中組（33人）

日時：2019年6月5日（水）

場所：A 大学附属幼稚園ホール（面積 209.16 m<sup>2</sup>）

- ・倫理的配慮：撮影に関する主旨を説明した上で、園と保護者の同意を得た。
- ・A 大学にて保育を学ぶ2年生6名と一緒に参加した。

### 活動1. 即時反応 ステップ

子どもたちは普段リトミック活動を行っておらず、ほぼ初めての経験であるため、まずは音楽をよく聴き、音楽に合わせて歩く活動を取り入れた。保育室からホールへ移動してきた解放感や、初対面の指導者（筆者ら）、お手伝いに来ている学生らに囲まれ、最初は落ち着かない様子で、音楽が鳴ると「キャキャ」と歓声をあげ、走り始める子どもが多かったが、音楽が止まるとほとんどの子どもたちが足を止めた。「休止」の際は、歩いて急に止まった時のポーズのまま静止していたり、ピアノの方を見る子が多く見られた。子どもたちが徐々に落ち着きを取り戻してくると、音楽を聞き分け、即時に身体を反応させ、足のステップもそれぞれのリズムに合うようになってきた。

### 活動2. わらべうた「こまんか」

子どもたちは初めて聴く歌であったが、「こまんか」という響きが心地よいため、すぐに一緒に口ずさみ始めた。一緒に口ずさむことにより、動きの大きさやエネルギーの強弱を感じ、主体的に動いている様子が見られた。また、波がだんだん大きくなり、立ち上がって動いた後に、指導者が子どもたちに「もっと大きくするためにどうしたらよいか」と問いかけたところ、一人の女兒が「こうすればいいんじゃない？」と言って、両腕を振り上げ、ジャンプを始めた。他の子どもたちはそれを見て「いいね〜！」と言い、腰から上を振り回しイリックスの状態を楽しみながら各々の大きな波を表現し始め、学び合いの姿が見られた。

### 活動3. わらべうた「おおなみこなみ」

「おおなみ」の部分では膝も使って両腕を振り上げ、「こなみ」のところでは肩をすくめ、小さな波を表現している子どもたちもいた。ほとんどの子どもが、両手をつないだまま片腕を上げてくぐり、背中合わせになることができなかった。途中から子どもたちの歓声が大きくなり、指導者の歌声が聞こえにくくなったため、ピアノ伴奏に切り替えた。振りの大小はできているが、腕の振りがリズムに合っている子どもは少なかった。

#### 活動4. わらべうた「おふねがぎっちらこ」

座って行う活動のため、活動3に比べ、子どもたちに落ち着きが見られ、身体の動きが音楽に合っている子どもが増えた。波が小さい部分では、肩をすくめ、前後に揺れていたが、波が一番大きくなる *f f*（フォルテッシモ）の部分では、背中が床に着くまでダイナミックに倒れている様子が見られた。指導者は子どもたちの様子を注意深く観察し、特に大きく動く際には思う存分動くことができるように音楽の速さの調節に留意した。

#### 活動5. 4拍スカーフ投げ

まず指導者がお手本を見せたところ、布地が薄く、フワフワしたスカーフであるため、それを受け取った子どもたちは嬉しそうにすぐに遊び始めた。スカーフを持って振る際には、リズムに合わせてその場でジャンプをする子どもが大勢いた。最初はスカーフを投げることに注意が向き、ほとんどの子どもたちが、次の1拍目に動きに間に合わなかった。そこでスカーフを振る際に「1・2・3・4」と一緒に声を出すようにしたところ、4拍振る部分にも傾注し、動きが揃うようになり、スカーフを振り上げることを更に楽しんでいる様子で歓声があがっていた。

### 8. 考察

幼稚園におけるホールは、子どもにとって特別なことをする特別な場所であるため、子どもたちは入室してくる時からわくわくしている様子が見てとれた。

実践時の季節や、子どもたちの集中力を持続させ、イメージを広げ、表現力を引き出すために、活動全体に対して「海」というテーマを設定したため、「海へ出発！」という合図で即時反応リズムステップを始めた。最初は子どもたちのステップが四分音符の速さに合っておらず、全体的に音楽よりもステップの方が速く、走り始める子どももいたが、音楽を止めるとほとんどの子どもが足を止めた。音楽が止まると、歩いていて急に止まったままのポーズで静止している子どもが多く、静止することを楽しんでいる様子であった。また、「休止」の際には、ピアノの方を見て次の音を待ち、次の音の始まりと共に身

体を素早く反応させようとしている様子が見られた。「休止」を数回取り入れると共に、子どもたちが徐々に落ち着き始め、足のリズムが音楽の速さに合うようになり、その後、イリンクスの要素を多く含む「走る」音楽を取り入れた。保育の環境の中でイリンクスの要素を取り入れる場合には、このようなタイミングをはかることは重要であると考え。更に、子どもたちが音楽に注意深く耳を傾け、即時に反応する活動へと導くために、「休止」は有効であるということが確認された。

前回の研究における実践では、リトミックの伴奏としてピアノを使用した。本研究における実践では、わらべうたを多く使用した。わらべうたを使用した理由として、次の3点が挙げられる。①子どもたちも一緒に歌いながら、能動的に活動することができる。②イリンクスの要素を多く含む活動を取り入れやすいと考えた。③リトミック活動として汎用性があると考えた。

「こまんか」では、子どもたちも一緒に口ずさむことにより、エネルギーの強弱が動きに現れやすく、音楽に合わせて子どもたちの身体と心が解放されていく様子であったが、「おおなみこなみ」の際には、子どもたちは一緒に歌うことよりも、両手をつないで横に振ることや、腕の下をくぐり背中合わせになるといった動きそのものに夢中になり、イリンクスの要素を楽しむことで音楽との関係性は薄れてしまった。今回の目的を果たすためには、このような動きを日々の保育で少しずつ取り入れるか、子どもたちが歌をしっかりと覚え、歌いながら動けるようにする必要があると感じた。

「おふねがぎっちらこ」では、子どもたちが座って両手をつなぎ、前後に引き合う動きをする。これと似たようなイリンクスの動きについて、カイヨワは「二人の子供が手をつなぎ、向かい合って腕を伸ばす。体をふんばって後ろに倒し、足の先と先をくっつける。この姿勢で彼らは息も切れぬばかりにまわり、ぱっと止まって、よろめく。このよろめきが楽しいのだ。」<sup>19</sup>と述べている。今回の実践では、子どもたちは向かい合って引き合う際や、背中合わせで押し合う際に、お互いの力の加減や、影響の具合を何度も確かめ合っており、時にはつないだ手を引きすぎて相手が倒れ込んでくるシーンも見られた。現代の子どもたちにとって、このような触れ合いの時間が貴重であるということが確認された。

4拍スカーフ投げで使ったスカーフは一般的に「リトミックスカーフ」と呼ばれ、カラフルで柔らかく薄く透けており、子どもたちにとっては少し大きめのフワフワした布で、ほとんどの子どもたちが手にすると喜ぶ物である。上に投げた後には、ゆっくりと落ちてくるため、子どもたちはスカーフを思い切り投げることができる。本活動でも子どもたちは上部を向きイリンクスの要素を楽しんでいる様子であったが、スカーフに夢中になることで、その動きはバラバラであった。そこで、「1. 2. 3. 4」と一緒にカウントすることで、4拍目で明確な準備（アナクルーシス）ができ、リズムに乗って更にスカーフを上へ高く振り上げることを楽しめるようになった。

ここまで述べてきたように、保育の環境において、安全性を重視した上で、イリンクスの要素を含む活動を計画することは難しく、工夫を必要とする。しかし、今回の実践で、音楽やリズムに合わせた身体の動き、すなわちリトミック活動を併用することで、子どもたちは危険を回避し、より楽しみながらイリンクスの要素を経験できていた。

フレーベルは、子どもが遊びの中に内面で思惟したこと、感じたことを自由に表現し、そこに喜ぶ姿、満たされた気持ちが表れることを大切に育もうとしていた。そして、子どもたちが日常的生活から心身を開放し、無心に遊んでいる状態の時、子ども一人ひとりが主体的であり、豊かな感性や表現する力が養われ、創造性豊かであると言える。

前回の研究において、リトミック活動には、カイヨワが唱えた「アゴン（競争）」・「アレア（運）」・「ミミクリ（模擬）」の3つの要素がバランスよく含まれていることがわかり、本研究において、更に「イリンクス（眩暈）」の要素を取り入れることが可能だとわかった。リトミック活動はカイヨワの唱えた4つの要素をバランス良く含む「遊び」であるということが明確になったと言えるだろう。

#### （謝辞）

このたび、引き続き武蔵野大学しあわせ研究所の研究助成を受けて、「遊び」としてのリトミック活動の可能性について研究することとなりました。

この研究を行なうにあたって、今回もA大学附属幼稚園の先生方に研究の趣

旨をご理解いただき、年中クラスの園児さんにご協力いただきました。

また、本研究を進めるにあたり、明星大学教育学部教育学科教授の板野和彦先生に多くのご助言とご指導を賜りました。

ここに深く御礼申し上げます。

## 注釈

---

- 1 新村出編(2018)『広辞苑第七版』岩波書店
- 2 中野茂著 (2019)「遊びのカーポジティブな可能性―」(「発達」通巻第 158 号) ミネルヴァ書房,p.58
- 3 同上書(2019)、p.62
- 4 ロジェ・カイヨワ著,多田道太郎・塚崎幹夫訳(1990)『遊びと人間』講談社学術文庫
- 5 フレーベル著,荒井武訳 (1964)『人間の教育』岩波書店,p.71
- 6 Friedrich Froebel(1826)『Die Menschenerziehung』Thoemmes Press,p.69
- 7 前掲書 (1964) ,p.71
- 8 フレーベル著,小原國吉・荘司雅子監修 (1982)『フレーベル全集第四巻・幼稚園教育学』玉川大学出版部,p.250
- 9 荘司雅子著,茂木正年編 (1985)『フレーベル教育学への旅』日本記録映画研究所,p.111
- 10 荘司雅子 (1984)『フレーベル研究』玉川大学出版部,pp.166-167
- 11 荘司雅子著,茂木正年編 (1985)『同上書』,p.118
- 12 高牧恵里 (2015)「フレーベルの音楽教育について」武蔵野大学教職研究センター紀要第 3 号,pp.68-69
- 13 全国リトミック音楽教育研究会編 (2012)『リトミック指導 2 [4 才児]』全音楽譜出版社
- 14 高牧恵里,松井いずみ,荒金幸子 (2019)「リトミック活動における『遊びの精神』についての研究」武蔵野大学しあわせ研究所紀要第 2 号,p.62
- 15 前掲書(1990),p.44
- 16 同上書(1990),p.60
- 17 同上書(1990),p.81
- 18 同上書(1990),p.44
- 19 同上書(1990),p.62